

Henry Lawson の *Telling Mrs. Baker* について

佐藤幸子

(1)

オーストラリアでは19世紀末頃よりかねてから人々の間にあった連帯意識つまり mateship が意識されるようになる。その時代精神が1880年に創刊された雑誌 *The Bulletin* (後に *Bulletin*) において具象化されてくる。*Bulletin* からは Bulletin 派と呼ばれる多くの詩人、作家が育っていくが、彼らは国民としての自覚、仲間意識、農牧生活の尊重、開拓者の苦闘への同情を共通のテーマとしている⁽¹⁾。Henry Lawson (1867-1922) は *Bulletin* をその活躍舞台として、*Telling Mrs. Baker* をはじめとして多くの作品の中で、オーストラリアの国民的 ethos である mateship を見事に描いている。

mateship についてはすでに論究してあるので⁽²⁾、今回は *Telling Mrs. Baker* における mateship を取り上げる。劇作家 Vance Palmer が *Telling Mrs. Baker* を舞台用に書き直すため脚本化の承諾を得たが、それは至極当然のことに思われる⁽³⁾。mateship を中心として、本作品における小説の技巧、登場人物について考察したい。

(2)

オーストラリアの自然は大雨、洪水、旱魃、山火事、灼熱の太陽など次々と姿を変えた破壊者であり、恐怖である。しかし人間の生活は自然とは別個の存在である⁽⁴⁾。自然の残酷さ、ブッシュ生活の厳しさに比して、彼の作品の基調はオーストラリアのエトスである mateship でつらぬかれて、その多くはあたたかな人情物語である。

本作品の主人公 Bob Baker はニューサウスウェールズのマックオリー河畔の^{ストック}牧場主であったが、旱魃のため彼の牧場の何千頭もの羊が死んで破産し、今は家畜追いの親方^{ボスドローバー}をしていた。彼は牛の大群をカーペンタリア湾に沿って2年がかりで新しい土地へ引きつれていく仕事を請けおい、私 (Jack) と仲間 (オーストラリアでは通称マイトと発音する。以下これに従う) の Andy は彼に同行する契約を結ぶ。親方と Andy と Jack, そして親方の弟の Nid, 親方のかみさんの Mrs. Baker, 彼女の妹の Miss Standish との間にはさまざまな形の mateship が展開される。

出発前 Andy は飲んべえの Bob のかみさんから旅の間断じて Bob と一緒には飲まないことを約束させられる。それが気に入らない親方は Andy を説得し、あざ笑い、罵ったが、Andy はいったん約束したことは必ず守りぬく男である。

しかし親方は旅のまにまに居酒屋に入りはじめ、それが少しずつひどくなって、ついには酒場女に引っかかってしまい、雇主から前借りをして、すべてのお金をその女(「ふところの暖い男を釣り上げる餌として奥地の酒場の亭主が雇っている女」)につぎこんでしまう。drover (家畜追い) というのは世の中に何が起ろうと、毎日家畜を進ませなければならない、それが家畜追いの掟である。(The world might wobble and all the banks go burg, but the cattle have to go through that's the law of the stock-routes⁽⁵⁾.) ついに Bob はくびになり、Andy と Jack も仕事を失う。

その上親方は彼らの取分からも多少引き出して使っていた。しかし彼らは親方を見捨てるわけにはいかないのである。(We could have started on the back track at once, but drunk or sober, mad or same, good or bad, it isn't Bush religion to desert a mate in a hole; and the Boss was a mate of ours; so we struck to him⁽⁶⁾。よっぽらっていようが、気が狂っていようが、人柄がよかろうが悪かろうが、困っている仲間を捨てるのはブッシュの仁義にはずれるのだ。)

親方はアル中のため死ぬが、その臨終の間際にかけて弟の Ned は葬式をすますと、例の女のいる酒場へ行って、主人をしたたか打ちのめす。Ned はおとなしくて朴訥な性格であり、相手は大柄で喧嘩の心得もあるが、しかしいったんこうと決めたことは死ぬまでやりぬくのである。

Ned は兄のかみさんの Mrs. Baker に嘘の手紙をかく。兄さんは熱病で亡くなった、できるだけの手はつくしたが安らかに亡くなったと。

ソーロングに帰った Andy は Mrs. Baker に会うという大仕事が待っている。Jack は Andy から Mrs. Baker のところへ一緒に行つてほしいと頼まれる。断るとこんな時仲間を捨てる奴は汚いやつだと非難される。(“You'll have to stick to me, you're surely not crawler enough to desert a mate in a case like this?”)。彼のつくどえらい嘘にあと押しして力を貸さなければならぬ、それがマイトというものであると説得される。

Andy は親方の荷物を調べて、さしさわりのあるものをすべて燃やした後、ふたたび、包みを縫い直して鞆袋に入れる。

(3)

本作品はいくつかの対称の妙によって奥行の深いものとなっている。まず対照的な2人の人物；私 (Jack) と Andy, Mrs. Baker と Miss Standish, そして圧巻は Andy のつく嘘と事実、こういうものが、からみあってこの作品を豊かなものにしていく。

親方の死について、かみさんにたいへんな嘘をつかなければならないと悩む Andy に対して Jack は事実を話すべきと主張する。かみさんは夫の本来の姿、ただの手前勝手な飲んだくれと知れば、逆に立ち直りも早く、彼女のためになるだろう。しかし Andy の言うには Jack は女というものを分かっていない。しかし、そういう Andy も実は女に1度だって嘘をついたことのない好青年である。ただ Andy の言うには死んだ^{マイト}仲間のことも考えてやらなければならないのだ。そして Andy は親方の荷物の中から革袋を取り出し、その中から商売女や人妻の写真や手紙をぬき出して燃やしてしまい、つぶやく“such is life.”⁽⁸⁾。Jack が人生に真正面から向きあおうとするのに対して、Andy には諦観、悟りがあり、しかしながらそれと共に思いやり、誠実さも失ってはいないのだ。親方のかみさんの Mrs. Baker とその妹の Miss Standish は対称的なタイプであり、前者には虚構が、後者には真実がつけられる。

オーストラリアの奥地は伝統的に男社会であると言われる。boundary rider (牧場の見まわり), shepard (羊飼), swayman (浮浪者), shearer (毛刈り職人—季節を追って渡り歩く), drover (家畜追—牧草地を求めて、時には1年も家を離れている) など様々な仕事がある⁽⁹⁾。こういう奥地の男達につきものは賭事、飲酒、喧嘩であって、これが留守を守る女たちにとっての心配事であった。そしてまた彼女らは厳しい自然の中で男たち同様無味乾燥で過酷な労働に耐えなければならなかった。

国民主義時代(1880-1920)は当時発刊されていた Bulletin の代表的作家の名をとって Lawson-Furphy の時代といわれた⁽¹⁰⁾。1920-30年代は地方都市の女たち (country women), 1960年代以

降は都市の女たち (city women) が小説の主要人物となり、Lawson-Furphy 時代には奥地の女たち (bush women) が主として書かれた⁽¹¹⁾。本作品の主人公 Bob の妻はまさに bush woman である。奥地の女たちはあつというまに干からびてしまう。“Her surroundings are not favourable to the development of the “womanly” or sentimental side of nature.⁽¹²⁾”

しかしそういう女たちの中で、Andy が “She’s a good little woman.” “One of the right stuff... She was always a damned sight too good for the boss, but she believed in him⁽¹³⁾.” と述べるように、夫を信じ大切につくすタイプである。頭は特にいいというわけではないが、話しの分る可愛らしい女性で、家事と子供の世話に甘んじて没頭している。

それに対して、彼女の妹の Miss Standish は 24, 5 歳で、色白で目もとの涼しい美人である。“She was a pretty, bright-eyed girl, and seemed quick to understand and very sympathetic, she had been educated, ... and wrote stories for the Sydney Bulletin and other Sydney papers⁽¹⁴⁾.” 洗練されていて、頭も良く、情けもあるシドニー娘である。奥地で日頃見なれている日焼けした女たちとは大違いである。

Mrs. Baker は Andy と Jack のおもいやりのある嘘に救われるが、賢い Miss Standish はすべてを察知して事実を話すよう促して、2 人に心からの感謝を述べるのである。

(4)

本作品を面白いものにしていく技巧のひとつは Andy が Mrs. Baker につく嘘である。彼女のもとに戻った Andy は親方の死について、“lie like hell⁽¹⁵⁾” するために、知恵をしぼる。事実とでっち上げた嘘との格差が大きく、それがこの作品を非常に楽しいものにしていく。以下、嘘と事実を対比してみよう。

Andy は親方は州境を越えてから体の調子が良くなかったというとかみさんは「あの人は出かける前から体の具合が良くなかったことを私は知っていたので、今度の旅は出ないようにと説き伏せようとしたけれど、私や子供らのために出ていったのです。お金を儲けてもう 1 度牧場をやりたかったのです⁽¹⁶⁾」と泣き崩れる。「夫の訃報を聞いた時には私はおそらくあの人はまた酒をのんだのだらうと思って少々苦しめられました⁽¹⁷⁾」というかみさんに向かって、Andy は「ソーロングの街を出てから親方は一滴も口にしませんでした。それは断じて保証できますよ⁽¹⁸⁾」と嘘を言う。

親方は隣の州のクイーンズランドの州境をこすとすぐ居酒屋に頻繁に出入りするようになり、その内酒場女にのぼせ上ってしまう。Andy と私は親方をつれもどすが、また女の所に戻ってしまうというのが事実である。

酒場の主人の Tanner さんは実の兄弟にもできないほどの親切を尽してくれた。土地の医者はまだ若いので、隣の町からもっと腕の確かな医者を頼み、その上医者馬車を曳く馬まで送った。その費用は全て彼が持ってくれて、1 ペニーも受けとろうとしなかったと Andy は述べる。

しかし実際は Bob から散々金をまき上げた女の働く酒場の主人は今や彼に店からしめ出しをくわせたのである。

彼女が “I wish I could thank him” というのに対して、Andy は “Oh, Ned thanked him for you⁽¹⁹⁾.” と言うが、皮肉にも Ned は Tanner をしたたかぶちのめしていたのであった。まさに「お礼」をしたのであった。

親方は実に静かに亡くなりました、熱がある間だけ少しおかしくなりましたが、最後はあまり苦しめませんでした、おかみさんや子供のことを話して、元気を出して生きてほしいと言

ましたと嘘を言う。

これまでも酒におぼれ、震えの発作で死んだやつのことをきいたことがあるが、これほどひどい死にざまはなかった。やっと臨終に間にあった弟 Ned を悪魔と間違えて、掴みかかったので、3人がかりでやっとりおさえた。数分の間正気に戻ると可愛い女房や子供の話をするが、たちまち、やつらがおれを地獄に引きずりこみやがるとわめきたてた。滅茶苦茶に気がふれて死んでいったのが事実であった。

Andy の絶妙な嘘に読者は大いに楽しまされる。

(5)

この作品の中には様々の形のユーモアがちりばめられている。Bob の葬式が済んで弟の Ned は例の酒場へ行って主人をなぐりたおすが、それを見ていた駐在の巡査は Ned に賭け、もう 1 人は主人の方に賭けるのである。

ソーロングの町に着いた 2 人が Baker のかみさんに会いに行くのを一刻のぼしにする様子がユーモラスに招かれている。まず昼飯を済してからということになるが、食後に一杯やるとねむくなる、大体野菜にプディングつきのローストビーフという豪勢な食事には馴れていないし、それに天気まで眠気をもよおすような空模様だ。ひと眠りしてから行くとしよう。しかし目が覚めてみると日が傾いている。夕食の時に訪ねるのは失礼だ、飯をあてこんだみたいになるから、夕食の後にしよう、ところが夕食をとっていると、ぜひ会いたいというおかみさんのことづてが届き、いよいよ“we'll have to face the music now!”より仕方ないと観念する。“And no get out of it⁽²⁰⁾.”という Andy の方が Jack より尻ごみしている様子である (He seemed to hang back more than I did⁽²¹⁾). さておかみさんの家の近くに来た時、Jack が向いの酒場によっていこうと言うと Andy はそんな必要はない、親方の二の舞いを演じることはないという。ところがおかみさんの家が間近かになると、酒場の方にそれてしまったのは、Andy の方であった。“Come on! We'll have this other drink since you want it so bad!⁽²²⁾”

そしていよいよ Baker のかみさんのところに着くと、Andy はまた私 (Jack) にささやくのであった“*For God's sake, ... don't put your foot in it and make a mess of it⁽²³⁾.*”しくじりそうなのは Andy の方である。そして“*For God's sake, stick to me now, Jack!⁽²⁴⁾”*と懇願する。

(6)

こういうユーモラスな作品は Lawson の得意とするところで、Lawson 自身かなり悪戯好きであった。彼の作家友達の Jack Moses と 2 人一緒になると、いつも子供のような悪戯をしたのである。

ある時フェリーで遊びにいこうと Jack が提案し、2人がフェリーに来ると、Jack は機関士と知り合いなので挨拶に行ってくると言って、Henry が新聞を読んでいる隙に船をおりてしまう。

今度は Henry が Jack に復讐をする番であった。クリスマスイヴの雑踏の中で、Jack が買って小脇にかかえた雄鶏の両足の紐を切って、鶏をこづいて追い出して大騒ぎになる。数日後警察から呼び出しがきた時、Lawson は自分が関っていることは言わないように、Jack に約束させる。Jack は罰金 (10 シリング) を事務員に払って放免され、そのことを報告に酒場に行くと、Henry と警官と例の事務員がその 10 シリングで飲んでいるところであった。しかし Jack はほどなくして、その 10 シリングを取り戻すのである。ある日 2 人は床屋に行き、Henry がひげそりをして

らっている際に、Jack は彼のオーバーを持って逃げ、きっかり 10 シリングで質入れをして、その質札を Henry に渡したのである⁽²⁶⁾。

Henry は執筆だけでは暮しもままならず、1 着のズボンがすり切れた時、彼は「ズボンがダメになる時」(“When your pants begin to go”) という傑作な詩を書いた⁽²⁷⁾。この様に Lawson 自身実にユニークで、とてつもなく奇抜な知恵とたぐいまれなるユーモアの持主であったのだ⁽²⁸⁾。

(7)

仕事の途中で亡くなった飲んだくれの drover の親方 Bob Baker とその仲間^{マイト}の Andy と Jack 間の mateship, その mateship に彩られた親方をかばうための様々の嘘, Andy と Jack そして Mrs. Baker と妹の Miss Standish など多くの対称が本作品をこの上なく楽しいものになっている。*Telling Mrs. Baker* はまさに mateship の賛歌である。そこにはいささかの曇りも迷いもなく、ひたすら mateship を賛美している。

しかし mateship にはいくつかのマイナス面がある。mateship はイギリスからの流刑囚の中に官憲が放ったスパイを摘発するために仲間同志が結束したといういささか陰惨な始まりを持つが、それが過酷な自然の中での労働には欠くべからざるものとして形成されていった。女囚を租とするオーストラリア移民の女性達は、男性の囚人より質が悪く、売春婦に身を落すものもあり、社会的に最下層に属し、「奴隷」の「奴隷」であった。従ってもともと極端な男性社会のエトスであった mateship は女性を対象とするものではない。しかし本作品においては女性蔑視という mateship のネガティブな面はまったく見られない。インテリの母親を持ち、その影響のもとに文学の道に入った Lawson の作品においては、女性差別はほとんど見られないのである。

彼の作品の多くはハッピーエンドで終るが、しかし“*Two Boys at Grinder Bros*” (1893) においては、珍しく mateship に対する冷めた目がある。鉄道車輛工場で働く Arvie は同僚の工員 Bill にいじめられているが、ふとしたことから Bill は好意をよせて彼を仲間として扱おうとするようになった。Arvie は急に当惑し“*This new, unexpected, and unsought-for friendship embarrassed the poor lonely child. It wasn't welcome*⁽³⁰⁾.” という結果になる。そして二度と彼は工場に戻らなかった。

Lawson の飲酒癖は一生続き、家庭をもって社会生活をする時にはいたるところでその不器用さをさらけ出し、妻と別居後は子供の養育費の支払いも滞りがちになる。ついには、シドニーの有名なフェリー発着所サーキュラー・キーで、まさに彼の短編のタイトル通り“*Send Round the Hat*” (1901) するところまで、落ちぶれていくのである。“*Telling Mrs. Baker*” における mateship へのひたすらな賛歌にもかかわらず、Lawson は「人間の本質的な善性に全幅の信頼を寄せていたかどうかは疑問であり、結局彼の信念というものは彼を絶望の淵から引き上げてくれるほど強くはなかった⁽³¹⁾」のである。

注

- (1) 小樽女子短期大学研究紀要第 18 号 p. 2.
- (2) 同上, p. 1.
- (3) 日豪ニューージーランド教師連盟 創立二十周年記念誌 p. 46.
- (4) オーストラリア, ニューージーランド文学会, 南半球評論, vol.8, p. 25-26.

- (5) Henry Lawson, *The penguin Henry Lawson Short Stories*, 1986. p. 197.
- (6) *ibid.*, p. 198.
- (7) *ibid.*, p. 199.
- (8) *ibid.*, p. 198.
- (9) オーストラリア・ニュージーランド文学会, *南半球評論*, Vol.1, p. 41.
- (10) 同上 p. 41.
- (11) 同上 p. 40.
- (12) Lawson, *ibid.*, p. 25.
- (13) *ibid.*, p. 197.
- (14) *ibid.*, p. 203.
- (15) *ibid.*, p. 199.
- (16) 平松幹夫, 古牟田敦子, 『ローソンの世界』 勁草書房, 1996, p. 152.
- (17) 同上, p. 152.
- (18) 同上, p. 152.
- (19) Lawson, *ibid.*, p. 206.
- (20) *ibid.*, p. 202.
- (21) *ibid.*, p. 202.
- (22) *ibid.*, p. 202.
- (23) *ibid.*, p. 202.
- (24) *ibid.*, p. 202.
- (25) 平松幹夫, 古牟田敦子, 前掲書 p. 306.
- (26) 同上, p. 307.
- (27) 同上, p. 309.
- (28) 同上, p. 355.
- (29) 有満保江, 「オーストラリア女性の地位の変遷」『南半球評論』 Vol.4, p. 29.
- (30) 研究社小英文叢書, “Two sundowners and other stories by Henry Lowson” 1972, p. 54.
- (31) G. ダットン (越智道雄監訳), 『オーストラリア文学史』, 研究社, 1985, p. 34.